地域の自然や人と深く関わる体験的活動を通して育むふるさと原風景へのあこがれ
―児童・生徒や保護者、地域住民らと協力してとりくんだ野鳥観察と絶滅危惧種・長野県の天然記念物ブッポウソウやフクロウの保護活動30年の総括―

長野県飯田市立竜東中学校
田畑　孝宏

Ⅰ　はじめに

平成13年８月、学習指導要領を受け、長野県では次のような学習指導改善の三つの柱を掲げ、教育課程改善の方向を示しました。

柱一　基礎基本の確実な定着を図り、伸びる力を一層伸ばす「分かる授業」
柱二　子どもの個性や地域の環境を生かす「特色ある教育課程」
柱三　共に生きる喜びや感動が生まれる「楽しい学校」

そして、この三つの柱を設定するに当たっての基本的な考えを次のように示しています。

「新しい柱には、保護者・地域住民が子どもと共に学んだり、必要に応じて教師と共に教えたりする『学習参加』による開かれた学校づくりを大事な理念にして、真に子どもを中心に据えた特色ある教育課程を編成し、学校・地域・家庭が一体となって子どもが行きたくなるような学校づくりを推進する考えを根底にしている」と。

また、各柱の具体には次のような項目も添えられています。

・地域の歴史・文化、人材、施設など地域力の積極的な活用
・やりがいや存在感を味わえる体験的・創造的な活動の充実　　等々

さらに、「こうした柱に沿った教育活動が、全教育活動の中で営まれたとき、児童生徒に『豊かな人間性・自ら学び自ら考える力』などの『生きる力』が育っていくものと考える」と。(「教育課程改善の方針」長野県教育委員会)

こうした教育課程改善の方向を受けて行われてきた学校教育の現場から、次のような声も聞きました。

「ここ数年、学力低下の不安が声高に叫ばれ、基礎的な知識・技能の徹底に意識が向けられている感があるが、『豊かな心』『美しい情緒』の育成は、生きる力を構成する重要な要素であることにかわりはない。さらに私は、総合的な学習を充実させている学級では自然に基礎学力まで向上している例をいくつも見てきている。『豊かな心』『美しい情緒』の育成は、基礎学力にも確実に波及すると信じている」と。

地域の環境を生かし、保護者や地域の皆さんの理解と協力を得ながら、地域と共に子どもたちが育っていく、そうした体験的活動を子どもたちと創ってみたいと以前より考え、実践を積み重ねてきました。

平成16年４月１日、阿智村立阿智第二小学校赴任初日の校舎案内の折、次の言葉が私の目にとまりました。それは、体育館の壁面に掲げられた絵画「学校の見える風景

(平沢多加子氏)」に寄せてありました。
『この自然に恵まれた伍和を故郷として育つことに誇りを持ち、自分のためにも人のためにもしっかり働ける人間になりたい(伍和教育を語る会)』

私は、地域の皆さんの子どもたちに寄せる、この強い願いや思いを大切に受け止めたい。そのために、地域の自然の豊かさやすばらしさを子どもたちと実感していこう。そして、子どもたちを温かく見守り支えてくださる地域の方々の気持ちや願いにも触れ、地域や保護者の皆さんの理解と協力を得ながら、それらに応えられる活動を見いだしていこう。地域の自然と人とに深く関わる活動を通して感性を磨き、しっかり働ける子どもたちを育んでいこうという思いを、今まで以上に強くしました。さらに、そうした活動が、希少生物の保護にもつながればと考えました。

Ⅱ　各校での研究テーマと成果

○上田市立東小学校（1988 ～ 1990）
「東小学区と神川におけるホタルの分布」
・第34回長野県学生科学賞作品展優良賞
（主催：長野県教育委員会）

○長野市立信田小学校高野分校
（1991 ～ 1993）
「高野分校における野鳥の分布とその季節変化」
・第37回長野県学生科学賞作品展優良賞

○天龍村立天龍小学校（1997 ～ 1999）
「めざそう！ブッポウソウの棲む村『天龍村』～野鳥観察とブッポウソウの保護活動を通して～」
・第33回全国野生生物保護実績発表大会において環境庁長官賞受賞
（主催：環境庁. 日本鳥類保護連盟）
・長野県林業コンクール県知事賞受賞
・長野県教育委員会表彰受賞

環境庁長官賞を受賞した天龍小学校の児童・保護者や関係者たち

環境大臣賞を受賞した阿智第二小の児童と保護者ら(環境省にて)

○阿智村立阿智第二小学校（2004 ～ 2006）
「『伍和』にフクロウを呼び戻そう大作戦！野鳥観察とフクロウの保護活動を通して～」
・第41回全国野生生物保護実績発表大会において環境大臣賞受賞
・信州教育プラン21プレゼンテーション部門　最優秀賞受賞
（主催：長野県教育委員会）
・長野県林業コンクール県知事賞受賞
・長野県教育委員会表彰受賞

○飯田市立上村・遠山中学校（2008 ～ 2010）
「ブッポウソウの棲む里『遠山郷』をめざして～野鳥観察とブッポウソウの保護

活動を通して見つめなおす、ふるさと遠山郷のかけがえのない自然～」
・第44回全国野生生物保護実績発表大会において林野庁長官賞受賞
・長野県教育委員会表彰受賞

○飯田市立座光寺小学校（2011 ～ 2013）
「フクロウの住む里『座光寺』をめざして！野鳥観察とフクロウの保護活動から～」
・第47回全国野生生物保護実績発表大会において林野庁長官賞受賞
・長野県教育委員会表彰受賞

○飯田市立竜東中学校（2014 ～ 2016）
「野鳥観察と、県の天然記念物ブッポウソウ・準絶滅危惧巣フクロウの保護活動を通して見つめなおす『ふるさと竜東』のかけがえのない自然」
・第50回全国野生生物保護実績発表大会において文部科学大臣奨励賞受賞
・長野県教育委員会表彰受賞

Ⅲ　３校の実践から

１. 阿智村立阿智第二小学校

『 伍和 』にフクロウを呼びもどそう大作戦！
～野鳥観察とフクロウの保護活動を通して～

〈野鳥観察の活動から〉

2004年（平成16年）４月５日、４年生18名の子どもたちと出会いました。早速身近で見られる野鳥の生態について話し、野鳥への興味・関心を高めました。その後開いた野鳥観察会は、主に休日を利用して１年間で16回行いました。

教室に飛び込んで来たエナガの幼鳥。窓ガラスに当たって弱ってしまったアオバトやキビタキ。校庭の木の枝に止まった大きなノスリ。寒い冬の朝に出会ったベニマシコ、ハイタカ。ついに聞いたアカショウビンやサンコウチョウの声等々、様々な野鳥や自然との出会いが次々に生まれていきました。

〈フクロウの声を聞いたよ〉

子どもたちと出会って間もない４月８日。綾菜さんが、「先生、ゆうべフクロウの鳴き声を聞いたよ。」と話してくれました。そこで、子どもたちにフクロウについておよそ次のように話しました。
・巣となる樹洞の減少で数を減らしてきていること。そのため、県の準絶滅危惧種にも指定されている希少種であること。
・巣箱をかけると、そこで繁殖する場合があることなど。

それまで何気なく見たり聞いたりしていた野鳥の姿や声が、子どもたちの目や耳に、そして心にまで届くようになっていったように思います。それほどまでに「伍和」の自然は豊かで、すばらしいものでありました。

また、野鳥観察をもとに展開していくことを願った、伍和の自然と人とに深く関わる活動のテーマは、フクロウの鳴き声をきっかけに、予想以上に早く子どもたちのものとなっていきました。

子どもたちの日記（４年生）から

参観日

今日、参観日がありました。鳥のスライド写真を見るために、体育館へ行きました。いろいろな鳥の写真を見ました。一番きれいな鳥は、キジのオスでした。私も、一度見たことがあります。最後に、全部の鳥の名前を言いました。言えないのが二種類あったけれど、だいたい覚えました。これからも野鳥観察をして、鳥の名前を覚えたいです。とってもいい参観日で、わたしはうれしかったです。今度の参観日が楽しみです。

オオルリ

水曜日にお母さんが、お店の窓に当たって死んでしまったオオルリを持ってきてくれました。見てみたら、本当に青かった。オオルリは、箱に入れてやりました。そして、写真をとりました。何日か置いておいて、見られるようにしました。でも、ネコに見つかったので埋めました。ぼくは、「こんなに青くてきれいなのだ。」と思いました。

５月 19 日　４時間目の鳥

４時間目の終わりころ、珍しいエナガのヒナが教室に飛び込んできて、下に「ドタン！」と落ちました。みんなが大騒ぎして、にぎやかになりました。

貴司君の方にエナガが飛んでいって、窓の前に止まりました。目がクリクリしていてかわいかったです。先生が、頭を使ってエナガを捕まえました。そして、「逃がしてあげないと親鳥が心配するよ。」と言いました。それまで騒いでいたみんなが静かになりました。逃がしてあげようと一階に行ったら、本当に親鳥が二羽、電線の上で鳴いていました。先生の言った通り、「鳥にも知恵や心があるのだな。」と思いました。エナガが親鳥の所へ帰れたかが心配です。

今日のことは、一番うれしかったです。「また、会いたいな。」と思います。

６月７日　アカショウビン日記

この前、アカショウビンの鳴き声を聞きました。聞いたのは、新聞配達が終わった６時 45 分ごろでした。声は小さかったけれど、牛小屋の方から聞こえてきました。次は姿も見てみたいです。

3月15日　野鳥観察会

今日、野鳥観察会がありました。最初に、ザゼンソウを見に行きました。見渡す限りザゼンソウがありました。次に、伊賀良神社にフクロウの巣箱を見に行きました。神社の入り口の雪の上に、鳥の羽がたくさん落ちていました。巣箱を見ると、入り口の下の部分の木が削れたようになっていました。「もしかしたら・・。」と思いました。フクロウが巣箱に入ってくれるといいです。帰りに、咲良さんの家の方へ行くとき、ベニマシコを見ました。赤っぽい色がはっきり見えました。私は、ベニマシコを見たのは初めてだったので、とってもうれしかったです。それに、ノスリも見ました。お母さんと帰ってくる途中、最初はトビかと思って見ていたら、尾の形や羽の形が違って、尾が長方形で幅広い形なので、たぶんオオタカだと思います。私は「伍和は自然が豊かだな。」と思いました。

フクロウ日記(4年生)から

フクロウ探し大作戦

「フクロウを見たことある。」と、お父さんやお母さんに聞いてみました。お母さんは知らなかったけれど、お父さんは、「フクロウなら一回か二回、聞いたことがあるに。」って言いました。「どこで、どこで。」って聞いたら、「咲良ちゃんの家に行く森だよ。」と言いました。ぼくも、一度鳴き声を聞いてみたいです。

フクロウ探し大作戦

ぼくは、フクロウのことをお兄ちゃんに聞きました。そうしたらお兄ちゃんは、「見たことがある。」と言って、フクロウのいた場所を教えてくれました。その場所は、県道と学校の間の森だそうです。ぼくは、阿智村にフクロウがいるのだなと思いました。

巣箱で繁殖したフクロウ

フクロウ探し大作戦

私は、「フクロウが、みんなで作る巣箱に入ってくれるといいな。」と思います。フクロウを写真で見たり、テレビで見たりしたけれど、実際にこの目で見たことはありません（鳴き声も）。もし、フクロウが巣箱に入ってくれたら大切にしてあげたいです。お母さんやお父さんや家族全員、フクロウを見たことがないそうです。だから、もしフクロウが巣箱に入ったらとてもうれしいです。わたしは、小さい頃からフクロウをこの目で見たいと思っていました。だから、この学習でフクロウが見られたら、「阿智第二小学校の子どもでよかった。」と思うでしょう。今からドキドキしています。

４月 20 日　フクロウ日記

今日、フクロウ探しの計画を立てました。ぼくの家の周りに、もしかしたらいるかもしれません。友だちの家では、鳴き声がすると言っています。でも、ぼくは聞いたことがありません。おばあちゃんが、声を聞いたと言います。もしいたら、どんな大きさか見てみたいです。

５月５日　フクロウ日記

私は、休み中にお父さんに買ってもらった「鳥の図鑑」のフクロウのページを開いて絵をかきました。そして、フクロウのことを調べました。調べたことを書いた紙を明日持って行きます。フクロウは、よく見ると可愛いものです。目が丸く、顔が回る時は顔をかしげているみたいで、可愛くて面白いです。けれど、獲物をおそう時は何だか凶暴な鳥みたいで、少し怖いです。でも、フクロウは生きているのですね。

６月１日　フクロウ日記⑥

日曜の夜、「ホーホー、（１～２秒後）ゴロスケ　ホーホー」という鳴き声を７回以上も、お父さんとお母さんといっしょに聞きました。私が歯磨きをしてから、さあ寝ようと思って、お父さんとお母さんに「おやすみ」と言って、二階へ行きました。そして、布団に入ると、さっきよりもものすごく大きなフクロウの声が聞こえてきました。その声の大きさは、さっき聞いた何倍もある声でした。こんなに大きく聞こえるということは、私の家の近くの林にいるのかもしれません。 また、探してみます。

６月８日　鳥日記

土曜日の夜、10 時半くらいに寝ようとして電気を消した時、「ホー　ゴロスケホホー、ホッホッホー」と聞こえました。また電気をつけて、ぼくとお兄ちゃんと外へ出たら、「ホー　ゴロスケホッホー」と聞こえました。

日曜日の３時頃、友だちと遊ぼうとボールを持った時、「カッコウ、カッコウ、カッコウ、カッコウ」と鳴いていました。あと、キジが「ケンケン」と鳴いた後、「バタバタバタバタ」と羽をふるわせるのを見ました。

３月７日　フクロウ

２月 10 日ごろ、日奈子さんのおばあさんが、栗矢の「土どよ」という場所で、フクロウの声を聞いたそうです。だから、ぼくも聞きたいと思いました。２月 17 日の夜 10 時半ころ、お母さんに呼ばれたので外へ出てみたら、フクロウが２～３分間鳴いていました。家の前の林で聞きました。フクロウの声が聞けて良かったです。

私たちは、３年間におよぶフクロウの保護活動と野鳥観察を通して、ふるさと伍和の自然の豊かさ、すばらしさを実感することができました。そして、自然の厳しさと優しさも。さらに、多くの方々の親切や真心にも触れることができました。

私たちの活動を理解し、支え、協力してくださったお父さん、お母さんをはじめ、多くの方々に感謝いたします。本当に多くの方々の協力を得て、ようやく私たちが作った巣箱でフクロウが繁殖してくれるようになりました。

３年前、昼神温泉朝市で花の苗を買って下さった方々とは、今でも手紙のやりとりが続いています。県外の遠くから、わざわざ学校を訪れてくださる方々もおられます。今年５月には、三重県の伊藤さんご家族が、巣箱で繁殖したフクロウのヒナを見に来てくださいました。そして、次のような手紙を送って下さいました。

伊藤さんからのお手紙

前略　先日は大変お世話になりました。花の苗を購入した御縁で、皆さんにお会いできたこと、フクロウの赤ちゃんを見られたこと、本当に感謝しています。皆さんが取り組んでおられる活動が、鳥の繁殖ということだけではなく、すばらしい勉強をしていることと思い、ただただ感服しております。この前、鳥の観察の帰り道、子どもさんたちと話しながら、『みんなそれぞれに大人になり、伍和地区には住んでいない人も多いかもしれないけれど、子どもの時にこの活動をしたことが、きっと財産となって、自分たちの故郷を誇りに思えるよ。』と話しました。これからも、私たちに出来る範囲でお手伝いができたらと思っています。いつまでもこの活動が続きますように。皆様もお元気でお過ごし下さいませ。さようなら。　　草々

今後も、みんなでこの活動を続け、フクロウを守っていくことができたらと考えています。これからもまだまだ様々な困難があることでしょう。しかし、命を支え合うフクロウの兄弟と親子の姿に学び、私たちは協力し合ってそれらを乗り越えていきたいと思います。

２．天龍村立天龍小学校

めざそう！ブッポウソウの棲む村
『天龍村』
～野鳥観察とブッポウソウの
保護活動を通して～

県最南端にある天龍村では、1997年（平成９年）４月、天龍村立平岡小学校（児童数69名）の４年生15名が、村内に環境の異なる５つの調査コースを設け、野鳥観察を始めた。１年間に220回のセンサス調査を行った結果、30科65種の野鳥を確認した。観察を続ける中で、子どもたちは、役場庁舎の通気口で繁殖するブッポウソウをみつけ、その後、定期的に観察を続けた。本種の観察から巣箱設置による保護活動へ至った経緯を「天龍小学校開校10周年記念誌」（2007）より抜粋して以下に記す。

子どもたちと地域の方々に支えられ確かに守られてきたブッポウソウ　　田畑孝宏

平成９年７月 15 日午前４時、４年生の子どもたち全員が天龍村役場の駐車場に集まった。ブッポウソウの雛の誕生を確かめるためである。階下の駐車場でじっと耳を澄ますこと 30 分。屋上にある通気口から「キチキチ・・・」と、二羽の雛の声。雛の誕生を喜び合い、無事に巣立つ日を願った。

その矢先の出来事だった。「先生、大変だ。役場に足場がかかった」「ブッポウソウ、大丈夫？」「このまま足場が組まれたら、ブッポウソウがだめになる」「どうしよう。校長先生にお願いするか」と、子どもたち。

汚れが目立つようになった役場庁舎の壁面塗装工事のため、ブッポウソウが繁殖する通気口のすぐ下まで鉄製パイプの足場が組まれ始めたのだ。

しかし、たった一番の鳥のために、村の大事な工事を中断できるのか。夕刻も迫る。子どもたちを帰宅させた後、夜まで迷った。無理をお願いしては、校長先生にも迷惑がかかる。しかし、ブッポウソウは県の天然記念物。子どもたちの願いでもある。これ以上工事が進んだら、ブッポウソウは巣を放棄するだろう。猶予はない。深夜、出張から戻られた山口赳校長に工事の中断を申し出た。

翌日、秦正村長より工事中断の知らせが届く。子どもたちと共に、ブッポウソウの無事を喜んだ。その後、役場からは連日のように電話が。「まだ雛は巣立ちませんか。いつ頃巣立ちますか」「お盆明けには工事を済ませたい。契約した会社も予定が組めない。足場の費用も安くはない」。担当された役場職員の方々も、心穏やかではなかったことだろう。私たちも、朝に夕に、観察に都合の良い天龍中学校のプール横から役場の通気口を覗く日々が続いた。

天龍村役場庁舎屋上の通気口で繁殖していたブッポウソウ

壁面工事がはじまった天龍村役場庁舎

夏休みに入って４日目の７月 29 日、ようやく最後の雛の巣立ちを確認。一緒に雛の巣立ちを見守ってきてくれた子どもたちも、ほっとした様子であった。無理もない、連日、早朝から炎天下での観察であったのだから。

この出来事をきっかけに、子どもたちのブッポウソウ保護への気運はいっきに高まった。「巣箱を作ってかけよう」「林もいいけど、橋にもかけたら。だって、役場の通気口で繁殖するのだもの」。こうして「めざそう！ブッポウソウのすむ村『天龍村』！」の活動が始まった。

実際に巣箱を作り始めたのは翌年４月。「なつみさんたち（向方小、福島小の子どもたち）が来たら、一緒に作ろう」との、子どもたちの心遣いからである。子どもたちが５年生を迎える平成 10 年は、天龍小学校開校の年でもあった（この年、村内３小学校１分校が統合した）。

巣箱の材料は大工をされている歩美さんのお父さんが、丁寧に製材して届けてくださった。巣箱かけを支えてくださったのは保護者の皆さんと林業に携わる「天龍緑の少年団」指導員の方々。高い木の上の作業も慣れたものだった。天竜川にかかる橋に巣箱をかけるための高所作業車も、村の板倉電設社長さんのご厚意でお借りすることができた。こうして４月 29 日、無事巣箱設置完了。

しかし、一抹の不安もあった。４月に開かれた、村の「緑の少年団」打合せの会で、「橋に巣箱をかけてもいいが、本当にブッポウソウが入るのかな」と秦村長。子どもたちの願いではあるとはいえ、事を起こすことの重大さを感じた。「栄村（以前より調査している地域）のブナ林とは条件が違う。もしブッポウソウが巣箱に入らなかったらどうしよう」。不安な日々が続いた。

５月 19 日、郵便局員の宮澤さんから吉報が届く。「清水口の橋の巣箱にブッポウソウが入ったに」。教室で、子どもたちと飛び上がって喜んだ。４日後の 23 日には、子どもたちが水神橋の巣箱でも利用を確認。こうしてこの年、役場庁舎通気口を含む３ヶ所でブッポウソウの繁殖を確認することができたのである。

巣箱かけによるブッポウソウの保護活動が始まって 10 年目の今年（2007）、長野県内で確認された繁殖番数は 16。そのうち９番が天龍村での繁殖になる。環境省、県指定の絶滅危惧種。県の天然記念物。今年からは、イヌワシと並ぶ県の特別指定稀少野生動物。

希少種ブッポウソウは、この天龍村で、多くの方々の理解と協力と熱意によって、確かにその命を繋いでいる。

1997年（平成9年）7月24日（木曜日） 第四社会 24

天竜村役場にブッポウソウ
今月中にも巣立ち
改装工事ストップ

庁舎の改装工事が進む下、巣立ちが近いことが分かり、村は工事の一部をストップ。伊那市の天竜村役場で、県天然記念物の鳥「ブッポウソウ」が巣を掛けている。鳥好きの小学校教師の観察から。

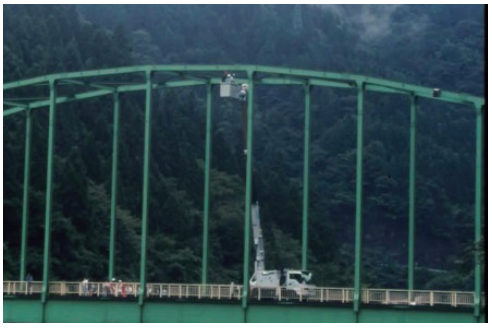
ブッポウソウは、五月ごろに東南アジアから飛来する夏鳥。ハトほどの大きさだが、全体的に暗緑色で、赤っぽいくちばしを持ち、羽を広げると白い模様が見える。庁舎裏側の一番高いところにある通風ダクト内に巣を構えているらしく、えさをくわえた親鳥が時折出入りするのを確認。巣の周辺に足場を組むことになったため、「親鳥は警戒心が強い。巣立ち直前の今の状態を見守りたい」と話している。

えさをくわえ、役場庁舎の屋上にとまるブッポウソウ

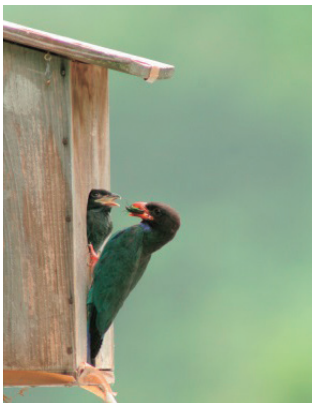
ブッポウソウが巣を構える通風ダクト（写真右上）を見上げる役場職員ら

平成９年７月24日の新聞記事

ブッポウソウの巣箱作り（上）
高所作業車を使っての巣箱かけ（下）



児童・保護者らと、村内に設置した17個の巣箱



巣箱で繁殖したブッポウソウ

天龍小学校開校 10 周年記念誌によせて

ブッポウソウの保護活動（環境庁長官賞受賞）を通して思うこと

鈴木　歩美

私たちが小学校 4 年生になった時に担任の先生が替わり、それがきっかけで野鳥観察を始めました。正直、最初は興味が無く、鳥のことなど何も知らなかった私たちも、気づけば多くの鳥の名前を覚え、姿や鳴き声で見分けられるようになっていました。

クラスみんなで研究したブッポウソウは、長野県の天然記念物にも指定される数の少ない鳥で、瑠璃色に輝く美しい鳥でした。このブッポウソウが、役場庁舎で繁殖していることを知り、この鳥について調べたり、巣箱をかけて保護したりすることにしました。そして、この研究の成果が認められ、平成 10 年 11 月 30 日に環境庁で行われた、第 33 回全国野生生物保護実績発表大会で環境庁長官賞をいただくことができました。大勢の人たちの前で発表することに慣れていなかった私は、上手く発表することができるか不安で、緊張したことを今でも覚えています。

私たちが、このような立派な賞をいただくことができたのは、活動に協力してくださった多くの皆様のおかげだと感謝しています。また、村の多くの方々にブッポウソウの存在を知ってもらうことができたこと、ブッポウソウが村の鳥「村鳥」に指定されたこと、私たちが始めた活動が、今でも後輩たちによって続けられていることを、嬉しく思っています。

みんなで一つのことにとり組み、頑張った日々。役場や村の皆さんはもちろん、緑の少年団指導員の皆様や板倉電気設備会社の方々、県の林務課の方々など、この活動を通して出会った方々。そして、環境庁長官賞をいただけたことは、今でも忘れることのできない思い出です。

天龍村は、平成11年1月の村議会において、ブッポウソウを村鳥に指定し、本種の保護に取り組んでいる。

巣箱かけによるブッポウソウの保護活動は、天龍小学校と、天龍村みどりの少年団によって引き継がれ、今年(平成29年)で20年目を迎えた。毎年、10つがい前後のブッポウソウが、この天龍村の巣箱で繁殖を続けており、長野県はもとより、東日本における貴重な繁殖地のひとつとなっている。当時の子どもたちは成人し、中には役場職員、緑の少年団指導員、あるいは保護者として活動に参加してくれている。

保護活動で県知事表彰

天龍小 みどりの少年団が受賞報告

2017．8．2　「南信州新聞」の記事より

３．飯田市立遠山中学校

絶滅危惧種・県の天然記念物“ブッポウソ”の棲む里「遠山郷」を目指して！
～野鳥観察とブッポウソウの保護活動を通して見つめなおす ふるさと「遠山郷」のかけがえのない自然～

はじめに

本校は、長野県の南部、飯田市の市街地から南東25kmに位置し、日本百名山南アルプス聖岳を源に流れ出る遠山川と、伊那山地の主峰鬼面山を源に発する上村川によって刻まれた峡谷「遠山郷」の標高422ｍにある。

2009年（平成21年）４月、上村中学校と遠山中学校の２校が統合し、新生遠山中学校として新たな歩みを始めた本校は、「切磋琢磨」「明朗誠実」「郷土敬愛」を学校教育目標に掲げ、新たな伝統と校風創りに励んでいる。

統合初年度に続き、平成22年度も「郷土愛」の精神を大切に考え、「郷土の歴史・文化・自然に学び、ふるさと遠山郷を愛し誇れる人に」を目標に、郷土学習の一層の充実を図ってきた。その中核をなす「総合的な学習の時間」は、大切な学びの場として位置づけられている。

統合して10名になった２年生は、「総合的な学習の時間」にどのような活動に取り組むか皆で話し合った結果、平成20年度の上村中学校１年生（３名）と同様に、「野鳥観察と希少鳥類の保護活動を通してふるさと“遠山郷”の自然のすばらしさを実感してみたい」と考え、この活動に取り組むことになった。

活動の目的

・遠山郷に生息する野鳥分布状況を明らかにする。
・遠山郷だから見られる絶滅危惧種、希少種の生息状況を把握する。
・絶滅危惧種、希少種の保護策を考え、実施する。

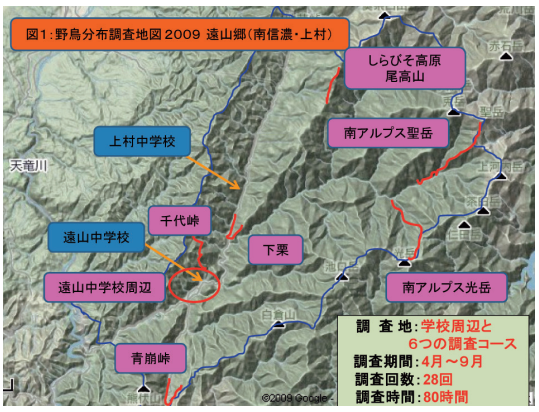
これらの活動を通して、「ふるさと『遠山郷』の自然や人と深く関わり、故郷を見つめなおし、自然の豊かさやかけがえのなさ、地域に暮らす人々の温かさを実感することができたら」と考えた。

活動内容

（１）遠山郷における野鳥の生息分布調査

①　調査方法

図１は、調査地「遠山郷」の地図である。実線で囲まれた地域が、旧上村・旧南信濃村両地区を合わせた「遠山郷」。21年度は、主に調査を行った学校周辺のほか、青崩峠やしらびそ高原尾高山、南アルプス聖岳と光岳、下栗地区、千代峠の６つの調査コースでも１～３回のラインセンサス調査を行った。全調査回数は28回、調査時間は80時間になる。



②　調査結果

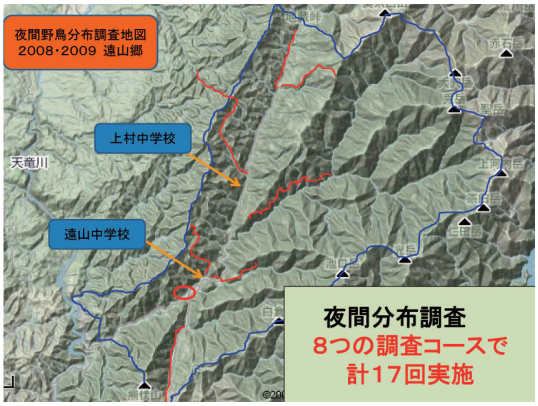
・４月～９月の６ヶ月間に、80種の野鳥を観察した。

・分布の特徴の一つは、20年度に調査を行った上村地区に比べ、20種類も種数が多いことである。河川上流部の上村地区に比べ、下流にあたる南信濃地区では、サギ類やカモ類、イカルチドリなど、天竜川水系で見られる水辺の鳥が多く生息していた。また、下栗地区では、ほかの地区で見られなかったオオヨシキリやこの種に托卵するカッコウも確認できた。
・標高2000mのしらびそ高原や、南アルプスを有する遠山郷は、亜高山帯や高山帯に生息するルリビタキやメボソムシクイ、キクイタダキやウソ、ホシガラスやイワヒバリなども生息していた。今回の調査では確認できなかったが、南アルプスには、国の特別天然記念物ライチョウも生息している。山岳調査を支えてくださった、山の会の皆様には感謝である。
・20、21年度の調査で環境省指定の絶滅危惧種３種、準絶滅危惧種１種、長野県の絶滅危惧種７種類、準絶滅危惧種３種類を確認することができた。

以上の結果から、遠山郷は、全国的にも数を減らしている貴重な野鳥が生息している、かけがえのない場所であることが明らかになってきた。

③　夜間調査の結果から

20年度は４つの林道で８回、21年度は３つの林道で４回と、和田のお寺（龍淵寺さん）で１回、22年度は２つの林道で４回の計17回実施した夜間調査では、いずれも長野県の絶滅危惧種で、日本で最も小型のフクロウの仲間であるコノハズクとアオバズクの両種の生息を確認し、両種における生息環境の違いについてもわかってきた。



コノハズク：千代峠や赤石林道沿いに分布する標高1000m付近のブナ林を含む針広混交林に生息していた。

アオバズク：標高400mの和田地区にある龍淵寺の林に３つがいほどが生息し、夜間、遠山川にかかる橋の街灯に集まる虫を餌にしていることがわかった。近藤大知君の連日の観察によると、21年度は５月13日から９月27日までアオバズクの声を聞くことができた。

遠山郷では、小型のフクロウの仲間２種が、それぞれ異なる環境にうまく適応し、棲み分けていることがわかってきた。

④　夏休み中のエピソードなどから

７月30日の、旧上村中学校校庭でのウミネコの発見に続き、翌31日には上村中郷地区の電柱に止まるクマタカを発見。間近で

見た絶滅危惧種には驚いた。

アカショウビン：県の絶滅危惧種アカショウビンは、20年度の上村地区に続き21～22年度には南信濃地区でも確認することができた。上村地区では４カ所、南信濃地区では５カ所の計９カ所で生息を確認した。近藤葵さんと松下藍さんは、その様子をビデオカメラに記録している。

⑤　野鳥生息分布調査を通して

今まで意識して見たことのなかったオオルリやカワガラス、ウグイスやモズなど、身近で生活している愛らしい鳥たちや、クマタカやアカショウビン、コノハズクやアオバズクなど、絶滅が危惧される貴重な鳥たちにも出会うことができた。この活動を通して、生徒たちは、改めてふるさと遠山郷の自然の素晴らしさや、かけがえのなさを実感していった。

(２)ブッポウソウの保護活動

①　ブッポウソウ保護のねらい

ブッポウソウは、体調29cm。ハトくらいの大きさの鳥で、ツバメなどと同じ夏鳥。５月初旬、長野県に渡来し、繁殖を終えた秋には東南アジアの島々へ渡る。本来、古木にできた穴（樹洞）を使って子育てをする。「仏法僧」の声で鳴くのはフクロウ科のコノハズク。ブッポウソウは「ゲッ，ゲッ」とカエルのような濁った声で鳴く。樹洞のある古木や大木の減少により、急激に数を減らしている。信州大学教育学部　中村浩志教授らの調査結果によると、全国でおよそ250つがい。長野県ではおよそ15つがい前後が繁殖するのみといわれている。このため、環境省は絶滅危惧種に、長野県は昭和60年に県の天然記念物に指定し、保護してきている。

隣接する天龍村では、平成10年から巣箱設置が行われ、今では毎年10つがい前後が繁殖する貴重な繁殖地になっている。そこで、「この遠山谷にも巣箱をかけたらブッポウソウが繁殖するのではないか」「絶滅危惧種“ブッポウソウ”の繁殖地を遠山谷にも広げよう」と、巣箱設置による保護活動を始めた。

②　平成21年度の活動から

４月15・22・24日の３日間で15個の巣箱を完成させた。巣箱の大きさや設置場所などについて、信州大学教育学部　中村浩志教授よりご指導いただいた。巣箱の材料は、地元森林組合より無償で提供していただいた。４月18日には、巣箱を設置する場所を選定した。巣箱設置にあたっては、南信濃自治振興センターの方々に大変お世話になり、牧野飯田市長様より設置許可をいただくことができた。ブッポウソウが渡来する直前の５月６日、雨が降る中、遠山川にかかる８か所の橋に15個の巣箱を設置。その後、定期的に巣箱を見て回り、ブッポウソウによる利用の有無を確認した。

5月6日：巣箱設置

５月20日、巣箱近くの電線に止まる２羽のブッポウソウを確認。生徒たちは、初めて見たその美しい姿に感激した。その直後、ブッポウソウは巣箱の入口に止まったのだ。本当に自分たちが作った巣箱にブッポウソウが止まる姿を見て、生徒たちは驚くとともに、無事にこの巣箱で卵を産み、雛たちが元気に巣立っていってくれることを願った。

5月20日の観察から

その後、観察中の巣箱では、写真撮影のために巣箱に近づく人たちの姿も頻繁に見られるようになった。そこで、生徒たちは、ブッポウソウが遠山郷で安全に繁殖できるよう、「繁殖中の５月～８月は、なるべく巣箱に近づかない」「観察をする場合は、巣箱のある橋から離れた場所で観察する」等をポスターにし、この掲示と無線放送による呼びかけを南信濃自治振興センターにお願いした。

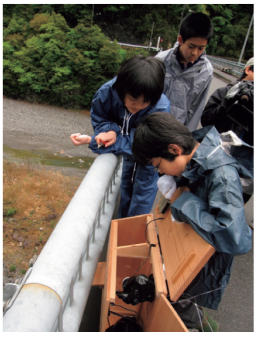
７月８日には、巣箱の中の雛に餌を運ぶ親鳥の姿を確認。７月22日には、雛が巣立った。７月22日、全ての巣箱を見て回り、利用の有無を確かめた。21年度は、１つの巣箱での繁殖が確認されたほか、もう一つの巣箱で産卵までが確認された。合わせて２個の巣箱が利用されたという結果になった。これは、遠山谷で確かにブッポウソウが繁殖した貴重な記録である。

③　平成22年度の活動から

22年度も、飯田市より巣箱設置許可をいただき、遠山川にかかる７カ所の橋に巣箱を設置した。今回は、テレビ信州さんのご協力を得て、巣箱の中にテレビカメラを組み込み、産卵から巣立ちまで、巣の中の様子を観察することができた。また、看板も設置し、繁殖に影響のない撮影や観察を呼びかけた。また、地域の方々にも関心を高めていただこうと、ブッポウソウ観察会を行った。20名を越える参加者があり、地域の中にも中学生が行う活動に関心を寄せくださる方々がいてくださることがわかった。

22年度の調査では、遠山川上流部でも繁殖が確認され、計２か所の巣箱でブッポウソウの繁殖を確認することができた。これは、遠山郷での繁殖が定着しつつあることを示す貴重な結果である。

4月29日：巣箱にテレビカメラを！



6月29日：雛に餌を与える親鳥

終わりに

遠山郷は、豊かな自然、かけがえのない貴重な自然が残る場所である。そして、子どもたちの成長に期待し、温かく見守ってくださる地域の方々が暮らす場所である。このすばらしい自然の中で、温かな地域の方々に支えられ、「ここに育てられている私たち」であることを、野鳥観察とブッポウソウの保護活動を通して実感した「総合的な学習の時間」であった。

この活動は始まったばかりである。今後も、地域の方々のご理解とご協力をいただきながらこれらこの活動を継続し、ブッポウソウがこの遠山郷谷に定着し、安定したブッポウソウの繁殖地になっていくことを、生徒たちの成長と重ねて期待する。また、遠山郷のかけがえのない自然と文化とを、生徒たちが将来にわたって受け継いでいってくれることを強く願っている。

巣箱設置によるブッポウソウの保護活動は、南信濃自治振興センターと南信濃町づくり委員会によって引き継がれ、今年平成29年も継続して行われている。毎年２～３つがいのブッポウソウが繁殖を続ける貴重な繁殖地になっている。

平成28年より、山階鳥類研究所の協力により本種にジオロケータを装着し、越冬地・渡りのコース解明の調査研究も始められた。

生徒たちの感想から

この２年間の活動を振り返ってみると、思い出に残ることがいくつもあいます。そのうちの三つを紹介します。一つ目は、遠山川の自然観察と称して、川遊びや魚釣りをしたことです。野鳥観察や野外での遊びを通して、統合一年目のぼくたちは、友達との仲を深めていくことができました。また、遠山郷のすばらしい自然に、じかに触れることができました。二つ目は、野鳥観察を通して、皆が鳥の名前がわかるようになったことです。ほとんどの友達が、鳥の姿を見れば名前がわかるようになりました。ぼく自身も、ブッポウソウの保護活動や日本百名山「聖岳」（７月）・「光岳」（９月）の登山を通して、去年以上にたくさんの鳥の名前を覚えることができました。三つ目は、ブッポウソウの保護活動を通して環境省に行ったことです。皆で協力し合ったこと。そして、「遠山山の会」の方々や自治振興センターの方々、森林組合の皆さん、中村浩志教授など、多くの方々にご協力いただいたおかげで環境省に行くことができたのだと思います。

この活動を通して思うことは、この活動が遠山中学校のみんなと仲良くなるきっかけになったということです。そして、普段あまり触れることが少なかった遠山郷の自然にふれることができたということです。さらに夢を持ち、夢を持ち続け、夢がかなうことを信じて努力すること。それが夢の実現につながるんだということです。これからも、みんなで夢の実現に向けて進んでいきたいと思います。

バードウォッチングをしたり川遊びをし

たりして、まだ慣れなかった上村の人たちとも一段と仲良くなることができました。そして、自然の大切さも分かってきた気がします。遠山川での川遊びも、ほかの学校だったらできない活動だと思います。バードウォッチングも、このような豊かな自然がないとできないだろうし、なによりもこの遠山郷だからこそ私たちの活動の中心であるブッポウソウも来てくれたのだと思います。

この活動を行う以前は、「コンビニに行くまで45分もかかる場所なんて、いやだなあ」と思っていたけれど、この活動を行うことで「すばらしい自然があるからこそバードウォッチングや川遊びもできて、ブッポウソウもいるんだ。遠山ってすごいなあ！」と思えるようになりました。

ブッポウソウの保護活動を行うことで、環境省にも行くことができたし、みんなの忘れられない大切な思い出も作ることができました。私たちの活動や、遠山郷のすばらしさを、多くの方々に広め、知っていただく機会にもなりました。難しくても、やることに意味があると思うし、不可能を可能に変えていくことがとても大切なことだと、この活動を通して思いました。そして、この遠山のすばらしい自然を、大人になっても忘れないでいたいなと思います。

昨年、統合する前に、上村の人たちと一緒に鳥についての学習をしたことがありました。その時は、全く鳥のことを知らなかったし、遠山の自然と関わることもありませんでした。しかし、昨年４月から始めた野鳥観察やブッポウソウの保護活動、川遊び、聖岳と光岳登山などを通して、自分の住んでいる地域の自然と関わる中で、自分の中にも変化が生まれてきました。「自然っていいなあ」と、少し感じ始めてきました。４月当初は、まだあまり話しかけたりすることもできなかった上村の人たちとも、鳥を見ながら「あの鳥は？」と聞いて、鳥の名前を教えてもらったり、一緒に鳥を観察することで仲良くなることができました。野鳥観察をして、オオルリやクマタカなど、様々な鳥を実際に見ることができたこともよかったと思います。

ブッポウソウの保護活動や登山では、地域の方々の協力のありがたさを強く感じました。多くの方々の協力があって、ブッポウソウも巣箱で繁殖することができたし、「遠山山の会」の皆さんの協力があったからこそ、日本百名山に２つも登ることができました。ブッポウソウについては、生態や分布など詳しく知らないままに巣箱をかけたのですが、実際に自分たちが作った巣箱に入った時は感激したし、繁殖が失敗した時には悲しかったし、無事にヒナが巣立っていった時にはうれしく思う自分になっていました。それは、一生懸命にこの活動に取り組むことができたからだと思います。そして、環境省にも行って林野庁長官賞という立派な賞までいただき、改めて自分たちの行ってきた活動の大切さやブッポウソウの貴重さを感じました。

これからも、中途半端にことを終わらせることなく、地域の方々の協力をいただきながら、ブッポウソウの保護活動を続けていきたいと思います。遠山の自然も、また、霜月祭りも、ぼくも含めて引き継いでいけるようにしたいと思います。そして、この遠山を離れた時に「また帰りたいふるさと」と思えるといいなあと思います。

私は、最初は鳥がいても気にならなかったし、なんとも思っていませんでした。でも、川遊びや野鳥観察、ブッポウソウの保護活動を通して変わりました。川遊びは、

自然に深くふれあう場になりました。野鳥観察では、今まで見たことはあっても名前を知らなかった鳥たちについて知ることができたし、改めて自分たちの地域を見つめ、どこにどんな鳥がいるか分かるようになりました。ブッポウソウの保護活動では、自分たちで巣箱を作ったり、自分たちで巣箱をかけたりして、保護活動に一生懸命取り組むことができました。初めて巣箱の近くの電線に止まるブッポウソウを見た時は、ものすごくうれしかったです。数はあまり多くはなかったけれど、絶滅危惧種ブッポウソウが私たちの巣箱で繁殖してくれたことは、すごいことだと思います。こうした活動は、今まで経験したことがなかったので、とてもいい経験になりました。そして、一番の思い出は、環境省に行ったことです。バスの中までは緊張していなかったけれど、バスを降り、環境省に入ったとたん、急にものすごく緊張しはじめ、発表する時は足が震えました。でも、無事に発表を終え、林野庁長官賞という立派な賞をいただくことができ、とてもうれしかったです。

鳥に関わる活動を通して、改めて地域をみつめる機会になったし、地域の方々との交流を深めるきっかけにもなりました。特に、遠山山の会の皆さんには大変お世話になり、日本百名山聖岳（７月）と光岳（９月）に登るという貴重な経験をさせていただくことができました。ありがとうございました。

これからもブッポウソウを守っていきたいし、さらにブッポウソウ以外の大切な鳥たちについても保護活動ができたらいいなあと思います。これからも、みんなで協力して続けていきたいと思います。

この活動を通して、いろいろなことを体験することができました。川遊びや登山、野鳥観察など、遠山の自然と深く関わることができたと思います。

ぼくの中で一番大きかったことは、野鳥観察です。始める前は、鳥の声すら聞いているような、聞いていないような、全く無関心のぼくでした。今でも知っている鳥の種類や生態など、クラスのみんなに比べたらものすごく少ないです。ブッポウソウの保護活動も、最初はどれだけすごいことなのか、正直分かっていませんでした。しかし、昨年11月30日に環境省に行き、発表させていただいたことを通して、すごい活動を行ってきたんだということを実感しました。遠山には多くの鳥と、すばらしい自然があり、とってもいいところだと思えるようになりました。活動を通して、鳥たちや生き物の命を守っていくことの大切さ、遠山の自然の大切さ、地域の方々の優しさなど、たくさん大切なことに気づかされました。こう思えるようになったのも、統合して上村の人たちと出会い、田畑先生と出会えたからだと思います。そして、友達の大切さについても気づきました。優希君、貴人君、卓弥君とも、今ではお互いに冗談を言い合える仲になることができました。もちろん、遠山の人たちともさらに仲良くなり、新しく転校してきた有記さんとも話せるようになりました。ぼくにとって遠山の仲間は、かけがえのない友だちです。２月から豊丘中学校に転校しても、成人しても、この仲間たちとはいつまでも仲のいい友達でいたいと思います。そして、この遠山を忘れずに、自分のふるさとについて、胸を張って語れる大人になっていきたいと思います。

Ⅳ　まとめ

信州は、豊かな自然に恵まれた場所である。しかし、社会の変化に伴い、人々の生

活は都会化し、少しずつ自然との関わりが希薄になってきているように感じていた。子どもたちの生活は、なおさらである。塾やスポーツクラブ、部活動、そしてテレビやゲームに多くの時間を費やし、自然と関わる体験が希薄になってきているように感じていた。それは、中山間地とされる場所においても同様であった。

また、メダカやホタル、タガメなどに代表される、各地域に生息してきた希少生物たちが、生息環境の変化から個体数を減らし、絶滅の危機に瀕していくという状況もあった。

こうした課題を合わせて解決していくことが、学校教育ならできるのではないか。また、それが、信州大学教育学部生態学研究室において、故羽田健三名誉教授、中村浩志名誉教授、山岸哲博士（元京都大学大学院教授、現山階鳥類研究所名誉所長）らにご指導いただき、鳥類生態学を学ばせていただいた者の使命ではないかと考えた。

以来30年、長野県内の小・中学校に勤務しながらブッポウソウの研究を続ける一方、受け持たせていただいたクラスの児童・生徒や保護者、地域住民らと共に、野鳥観察とブッポウソウを中心とする希少鳥類や生物の保護に取り組んできた。

中には、児童・生徒らの卒業後、活動が途絶えてしまった地域もある。しかし、各校で児童・生徒らが保護者や地域住民らの協力を得ながら取り組んだ、自然や人と深く関わる体験的活動は、よき思い出として各自の胸に刻まれていることと思う。

また、児童・生徒や保護者、地域住民らの理解と協力により、10年、20年と活動が継続している地域もあり、ブッポウソウをはじめとする希少生物の貴重な繁殖地となっている。ありがたいことである。

最後に、活動に熱心に取り組んでくれた児童・生徒、活動を理解し熱意を持って支え協力してくださった保護者の皆様、地域住民の皆様、各市町村および教育委員会をはじめ学校関係の皆様、ご指導いただいた故羽田健三名誉教授、中村浩志名誉教授、山岸哲山階鳥類研究所名誉所長、長野県（教育委員会、環境課、林務課、森林組合）、下伊那教育会生物委員会、伊那谷自然友の会、飯田市美術博物館、長野県科学振興会、長野県学校科学教育奨励基、信州の緑と野鳥を守る会、活動の振り返りと発信の場を与えていただいた下中記念財団、環境省、日本鳥類保護連盟をはじめ、多大なるご協力をいただいた関係機関の皆様には、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- JENKINSON,M.A. & R.M,MERGL1970. Ingestion of stones by oatsuckers (Caprimulgidae). Condor72：236-237.
- EKHUYZEN-MAASLAND,J.M.H,STEL. & B.J,HOOGERS.1962.Waarnemingen over de Draaihals Jynx torquilla L.Ardea50：162-170.
- KLAVER,A.1964.Waarnemingen over de biologie van de Raaihals (Jynx troquilla L.).Limosa37：221-231.
- DORNBUSCH,M.1968.Zur Nestlingsnahrung des Wendehalses.Falke 15：130-131
- HEUER, B&KRAGENOW,1973.Fremdkorper im Nest des Wendehalses.Falke 20：103.
- TERHIVUO,J.1977.Occurrence of strange objects in nests of the Wryneck Jynx torquilla.Ornis Fennica 54：66-72.
- TERHIVUO,J.1983.Why does the Wryneck Jynx torquilla bring strange items to

the nest ？ Ornis Fennica 60：51-57.
・矢澤米三郎（1929)『雷鳥』岩波書店.
・五味義尚（1929)「木曽に於ける仏法僧に関する調査」,『鳥彙報』１巻１号.
・山階芳麿（1941)『日本の鳥類と其の生態２』岩波書店.
・小林桂助（1957)『原色日本鳥類図鑑』保育社.
・清棲幸保（1965)『日本鳥類大図鑑Ⅰ』講談社.
・清棲幸保（1969)『野鳥の辞典』東京堂.
・小林清之助（1971)『ブッポウソウのなぞ』小峰書店.
・OSJ (ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN), 1974.Chech-list of Japanese Birds. ５th ed.Tokyo,Gakken.
・牛山英彦（1983)「長野県下におけるブッポウソウの分布と繁殖生態」,『長野県下における特殊鳥類報告書』長野県５：55－72.
・中村浩志・田畑孝宏（1988)「巣の下の『奇妙な物』ブッポウソウの知られざる行動を解く」,アニマ194：88－96,平凡社.
・中村浩志・田畑孝宏,August 1988 Why dose the Broad-billed roller bring strange objects to the nest ？ 日本鳥学会誌Vol.36.NO.4. 137-152
・中村浩志・田畑孝宏（1990)「ブッポウソウの雛の餌」,『日本鳥学会誌』38(３):131－139
・中村浩志・牛山英彦・田畑孝宏（1991)「貝殻などを集める奇妙な習性」,『動物たちの地球』28,鳥類Ⅱ④, ７－100 ～ ７－105,朝日新聞社.
・中村浩志（2004)『甦れ、ブッポウソウ』山と渓谷社.
・阿部学ほか（1991)「フクロウ・トラフズクほか」,『動物たちの地球』25,鳥類Ⅱ①,朝日新聞社.
・樋口広芳・中村浩志・植松晃岳・久野公啓・佐伯元子・堀田昌伸・時田賢一・守屋恵美子・森下英美子・田村正行(2005)、「ハチクマの渡り衛生追跡」,『日本鳥学会誌』54：167－171.
・中村登流・中村雅彦（1995)『原色日本鳥類図鑑』保育社.
・山岸哲（1997)『鳥類生態学入門』築地書館.
・山岸哲監修（2002)『近畿地区鳥類レッドデータブック』京都大学学術出版会.
・山岸哲・田畑孝宏（2009)「日本の希少鳥類を守る」,京都大学学術出版会.
・原一彦（1996)「天竜川水系の鳥－ブッポウソウ第2報－」, 上伊那教育会郷土館専委員会紀要18：２, １－10.
・渡辺央（1998)「新潟県に於けるブッポウソウの生息状況」,『鳥獣保護対策調査報告書』新潟県81－85.
・新潟県野鳥愛護会（2008)「新潟県におけるブッポウソウの生息状況と保護対策」,『野鳥新潟143』新潟県野鳥愛護会.
・飯田知彦（1992)「電柱を営巣場所にするブッポウソウの繁殖分布」,『Strix』11：99－108.
・飯田知彦（2001)「人工構造物への巣箱架設によるブッポウソウの保護増殖策」,『日本鳥学会誌』50（１）：43－45.
・飯田知彦（2008)「広島県におけるブッポウソウの個体群保全の成功例」,『日本生態学会全国大会ESJ55講演要旨』日本生態学会第55回大会一般講演Ａ２-10.
・日本野鳥の会（1978)「鳥類繁殖地図調査1978」, 日本野鳥の会.
・日本野鳥の会岡山県支部（1993)『岡山県におけるブッポウソウの生息状況』日本野鳥の会岡山県支部.
・日本野鳥の会鳥取県支部（2007)「日南

町におけるブッポウソウの繁殖状況等確認調査報告書」,『平成19年度鳥取県保護管理計画活動報告書』日本野鳥の会鳥取県支部.
・田畑孝宏（2000）「巣箱で繁殖したブッポウソウの生態」,『信濃教育』1366：18－25.
・田畑孝宏（2000）「めざそう『ブッポウソウの棲む村　天龍村』―野鳥観察とブッポウソウの保護活動を通して―」,『私たちの自然』日本鳥類保護連盟456：18－21.
・田畑孝宏（2003）「瑠璃色の忍者」,『Birder』６月,文一総合出版.
・田畑孝宏（2006）「雛に運ばれた餌の内容」,『Birder』６月,文一総合出版.
・田畑孝宏（2007）「子どもたちと地域の方々に支えられ確かに守られてきたブッポウソウ」,『天龍小学校開校10周年記念誌』天龍村立天龍小学校.
・田畑孝宏（2013）「準絶滅危惧種フクロウのすむ里『座光寺』をめざして」,『わたしたちの自然』日本鳥類保護連盟587：４－６.
・田畑孝宏（2016）「ブッポウソウとフクロウの棲む里『竜東』をめざして」,『わたしたちの自然』日本鳥類保護連盟604：６－９.
・環境省（2006）『鳥類，爬虫類，両生類及びその他の無脊椎動物のレッドリストの見直しについて』，環境省自然環境局野生生物課報道発表資料.
・環境省（2014）『レッドデータブック2014』
・環境相（2017）『レッドリスト2017』
・長野県（2004）『長野県版レッドデータブック』
・長野県（2015）『長野県版レッドリスト2015』
・松田賢・植田秀明・上野吉雄（2003）「温井ダム管理施設への巣箱架設によるブッポウソウ保護増殖の試み」,『高原の自然史』８：23－47.
・松田賢・長谷川匡弘・上野吉雄（2007）「ブッポウソウの給餌活動の日周変化と餌内容」,『高原の自然史』12：57－73.
・馬場芳之（2007）「九州におけるブッポウソウ巣箱設置の試み」,『比較社会学』九州大学13：57－62
・桐原真希（2007）「南部町のいきものたち『ブッポウソウ』」,『広報なんぶ』南部町７：14.
・葦原沙都子（2007）「日本に生息するブッポウソウの遺伝的多様性と集団間の遺伝的距離」，信州大学大学院教育学研究科教科教育専攻理科教育専修生態研究室卒業論文.
・峯光一（2008）「岡山県吉備中央町におけるブッポウソウの営巣環境と環境収容力」，信州大学大学院教育学研究科教科教育専攻理科教育専修生態研究室卒業論文.
・熊野彩（2008）「ミトコンドリアDNAによるブッポウソウとライチョウの遺伝的多様性の比較」，信州大学教育学部教科教育専攻理科教育専修生態研究室卒業論文.
・笠井勇二（2006）『仏法僧の不思議』幻冬舎ルネッサンス.
・国松俊英（2007）「巣箱　森のいのちを育てる」,くもん出版.
・仲村昇（2013）「ジオロケータを用いた小型鳥類の渡り調査」,『私たちの自然』日本鳥類保護連盟587：２－３.
・倉敷市立博物館（2014）「幻の青い鳥ブッポウソウ」,倉敷市立博物館.

田畑　孝宏先生
（たばた　たかひろ）

〈 略歴 〉

1963年　長野県下伊那郡豊丘村生まれ
1987年　信州大学教育学部生態学研究室卒業
1988年　上田市立東小学校勤務
2000年　信州大学教育学部付属長野小学校
2007年　信州大学教育学部生態学研究室内地留学
2014年　飯田市立竜東中学校
　　現在に至る

〈 研究歴 〉

・「長野県におけるブッポウソウの繁殖分布とその生態」
（1987　信州大学教育学部生態研究室）
・中村浩志・田畑孝宏,August 1988
Why dose the Broad-billed roller bring strange objects to the nest ?
日本鳥学会誌Vol.36.NO.4. 137-152
・中村浩志・田畑孝宏,March 1990
ブッポウソウの雛の食物
日本鳥学会誌 Vol.38.NO.3 131-139
・中村浩志・田畑孝宏（1988）「巣の下の『奇妙な物』ブッポウソウの知られざる行動を解く」,アニマ194：88－96,平凡社.
・中村浩志・牛山英彦・田畑孝宏（1991）「貝殻などを集める奇妙な習性」,『動物たちの地球』28,鳥類Ⅱ④, 7－100 ～ 7－105,朝日新聞社.
・「戸隠の自然」（分担執筆　信濃毎日新聞社. 1991）
・「自然と生きるためにできること」（分担執筆　ポプラ社. 1994）
・「下伊那川たんけんブック」（分担執筆　国土交通省天竜川上流河川事務所. 2007）
・「日本の希少鳥類を守る」（分担執筆　京都大学学術出版部. 2009）

＊研究、執筆論文、著書ほか本文中に記載

〈 勤務校 〉

長野県飯田市立竜東中学校
〒399-2221　長野県飯田市龍江9205
電話　0265-27-3169